

# alaクルーズ 新年のご挨拶

広報第43号  
平成28年1月1日

明けましておめでとうございます。alaクルーズ会員の皆さま並びに、日ごろよりご支援下さる皆さまにおかれましては、清々しい新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。また、昨年alaクルーズにご協力賜りましたこと厚く御礼申し上げます。さて、alaクルーズの昨年を振り返りますと、フロントスタッフ活動を初め、アーラとの共催のイルミネーション事業など、これまでの事業や活動を継続しつつ、小劇場での鑑賞事業を企画・実施するなど新規事業にも積極的に取り組み、市民の皆さまに喜んでいただけるalaクルーズを目指してきました。また、アーラで初めて開催された『世界劇場会議国際フォーラム2015 in 可児』にもスタッフの一員として積極的に関わり、海外や全国各地よりご来館いただいた皆さまを、好印象でお迎えできました。そして、このフォーラムに参加し、多くの人たちと出会うことができたことは、何事にも変え難い経験になりました。alaクルーズも設立より14年目となりますが、年々平均年齢が高くなり、活動などもマンネリ化が感じられます。この局面を打開しない限りalaクルーズにこの先、明るい光が差しきません。期待と不安の中熱い気持ちで活動に参加した当時、来場者の方から掛けられた一言に喜びを感じ、その緊張から開放された後の満足感と充実感を今一度思い起こして下さい。「alaクルーズとの関わり」や「ボランティア活動とは…」について、初心に立返りリフレッシュした気持ちで望んで頂きたいと思います。

(公財)可児市文化芸術振興財団は、ここ数年どの公共文化施設も行なっていない、海外に向けた事業が展開されつつある中、アーラのパートナーであるalaクルーズにも進化が求められます。地方の小さな町のアーラが今後益々注目され、そのような中で活動できる喜びを実感し、なお一層自己成長できるalaクルーズになることを願っています。皆さまにとってこの一年が、ご健勝にて充実した年になることを願っています。



特定非営利活動法人  
alaクルーズ 理事長 澤野親司



可児市文化創造センターala  
館長兼劇場総監督 衛 紀生

8回目の、新年あけましておめでとうございます。早いもので、アーラの館長に就任するために可児に住むことになって9回目の正月を迎えることとなります。この3月で常勤館長としての8年目が終わって、9年目に入ることとなります。非常勤で宮城大学・大学院の教員と館長を兼務していた1年を加えると、可児在住10年目です。非常勤だった最初の1年間は、それまでの前館長時代の4年間の事業データを分析して、5000万円以上の事業予算の劇場で全国ワースト5の収支比率32.1%(100円使って32円の収入)という惨状の原因を探り、それまでのアーラの経営をいかに「卓袱台返し」するかを、行きつ戻りつしながらの365日でした。常勤になる翌年度から導入する、たとえば地域拠点契約とか、インターネットチケットとか、ライフスタイルに合った選択をできるチケット制度とかを提案試行をしながらの可児市での最適経営の模索でしたから、いわば走りながら熟慮するという状態でした。それまでの「東京モデル」のやり方をすべて捨て去って、まったく新しい地域劇場の経営モデルを創らなければ、床面積18000㎡の都道府県レベルの大きな劇場と、わずか10万人という人口で商圈25万人のエリアマネジメントはできないと思っていました。ですから、私が3年間でやったことは、すべて「常識破り」のことばかりで、当時の筆橋事務局長(現教育長)は面食らったのではないかと想像します。気の毒な役回りになってもらいました。まったく新しい劇場経営の手法である「可児モデル」によりやく手応えを感じたのは、5年目の終わりに「国の特別支援施設」として全国15館の中に入ったとの通知を文化庁からもらった時でした。国の文化政策の大きな方針転換もアーラの追い風になりました。アーラの大胆な改革が進めている時を同じくして、アーラクルーズも改革の時間を経っていました。「変化」には摩擦と痛みと苦悩が伴います。アーラもクルーズも、ともに「変化」のための濃密な時間を過ごすことになったのは、何か大きな力による必然だったのではないかと、いまにして思うのです。アーラクルーズの皆さん、これからも宜しくお願いいたします。

# 石川県立音楽堂研修



10月24日(土)6時30分、私たちを乗せたバスは昇ったばかりの赤い太陽に見送られて今渡公民館を発ち、予定の10時過ぎに石川県立音楽堂に着き、早速集合写真を撮りました。ここは金沢駅東口に隣接し、新幹線の開通によって都心から直結され尚一層アクセスの良い場所になっています。石川県立音楽堂はコンサートホールと邦楽ホール、展示や演劇にと多目的に使える交流ホールに分かれています。邦楽ホールは720席。出入口のドアには金箔がはられ、和装のお客様にも配慮されたデザインの座席の木枠には漆塗りが施されてというように、あちこちにちりばめられた金沢工芸は、それだけで来場者を和モダンの世界に引き込んでしまいそうです。回り舞台や可動式の花道も装備されていて歌舞伎、長唄、三曲などにも対応できるようになっているそうです。邦楽ホールの楽屋には演奏の支度でしょうか、和装の女性たちが出入りしていて、通路には数竿の三味線が並べられていました。きっちりと着物を着こなした女性の振る舞いにも借り物ではない加賀の文化が顔を覗かせているようでした。オーケストラ・アンサンブル金沢の本拠地になるというコン

サートホールでは演奏のリハーサルが行われていました。客席は1560席でクラシック音楽に最適とされるシューボックス形式、入場すると真っ先に目に飛び込んでくるのが正面の舞台いっぱいにある大きなパイプオルガンです。このオルガンはホール建設と並行して1年半掛かりで設置された大掛かりなもので、年に100回程度演奏されているそうです。案内して下さったゼネラルマネジャーは“調度品になっていないパイプオルガン”と笑って胸を張っていらっしゃいました。石川県立音楽堂は建設当初、場所の決定で意見が分かれたそうです。

駐車場が広く取れて建設に制約が少ない郊外にするのか、多少制約があっても駅に隣接したアクセスの良いところにするかです。しかし金沢の街全体の活性化の一翼を担う音楽堂にしたいということで現地に建てられたそうです。「財政が困難になると真っ先に削られるのが文化教育部門、だから私たちはアクセスの良さを生かし、インターネットなど色々なマスメディアを使って石川県立音楽堂の活動と金沢文化を全国に向けて発信していきます」とのゼネラルマネジャーの言葉が心に残りました。昼は自由行動でそれぞれに思い思いの昼食をとった後、14時からの開演に先立ってバイオリンとチェロ奏者の二人によるロビーコンサートが催され、たちまち人で溢れかえりました。その後、お客様を迎えるフロント見学をさせて頂きました。ここではレセプションと呼ばれるフロント係の人たちは一定の研修を受けてアルバイトとして働く若い人たちでした。音楽資料室で手にした学友会だよりにレセプションの目標として寄稿されたものがありました。“レセプションの目標は『公演時、来場するお客様の管理を行い、舞台鑑賞しているお客様と舞台上の出演者の為に舞台に集中し心地よく過ごすことの出来る時間と空間を創造する』こと。この目標を達成するための業務として『来場者のチケットをもぎったり、クロークにて持ち物をお預かりしたり、席へのご案内、会場内・会館周辺・その他各種ご質問への対応』などの仕事をしています”



音楽堂を後にした後、近江市場で買い物をして帰路に就きました。陽が沈むと東の空に十二夜の月が輝いていました。



# イルミネーション2015

『冬のぬくもり』



製作中のスタッフ

昼間は割と暖かった12月6日(日)。日が暮れて寒くなった午後5時30分今年のイルミネーションが点灯しました。9月14日企画会議から



始まって、今日の点灯式に間に合わせようとスタッフが連日製作に取り組み頑張りました。今年のテーマは『冬のぬくもり』です。昔読んだ『笠地蔵』がよみがえってきます。年々手が込んだイルミネーションが製作され、訪れた人たちを2月13日まで楽しませてくれることでしょう。今年初めての点灯はランプシェード参加者の中から、市内の大橋優之助くん優羅さんご兄妹でした。点灯式に参加したスタッフは「きれいと喜んでもらえてうれしかったです。やった甲斐があります」と微笑んでいました。ランプシェードの製作をした人たちも喚声を上げていました。



さて試験点灯（うまく点きますように）



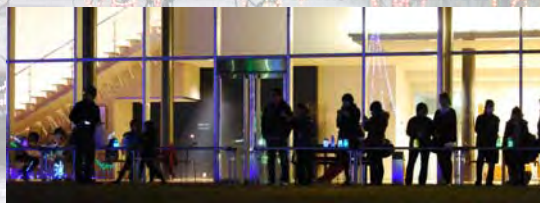
製作風景



点灯式



大橋優之助くん優羅さんご兄妹



今年で3回目となった“手作りランプをつくろう”が12月6日(日)美術ロフトで行われました。紙粘土とLEDを使って、オリジナルランプが出来るワークショップです。当日のalaクルーズスタッフは15名でしたが、何日も前から段ボールにラップを貼った粘土台や見本となるランプを作って準備してきました。15時よりスタッフから説明があり、参加者69名の制作が始まりました。まず、紙粘土にマジックで色を付けこねるのですが、子どもにとっては大好きな作業らしく、あちらこちらで、こねてこねてなかなか形を作ろうとしません。お父さんや

お母さんも「楽しくて没頭してしまいます」「子どもの心に戻ったみたいです」と一生懸命です。その為、子ども達は親に口出しされない分、自由に子どもの感性で出来上がっています。「光の穴はストローで開けると簡単だよ。楽し〜!」「ツリーのビーズはおもちゃ箱から持ってきたの。きれいでしょ」と目を輝かせて夢中になっていました。「来年もぜひ開催してね。何を作るか考えてくるから」とスタッフに話しかけていました。17時30分になってみんなの作品を芝生広場に並べよいよ点灯式です。兄妹が、カウンタウダウンでイルミネーションのスイッチを押すと同時にランプにも光が点灯されました。個性豊かなランプシェードの温かな光がもれ、忘れられない親子の時間が過ごせた一日だったと思います。





## フォローアップ研修を終えて

11月29日(日)星乃もと子氏をお迎えして3名の新人の方を含めクルーズ15名、財団4名が参加してフォローアップ研修が行われました。まず、スタッフルームでの座学です。劇場の表方(フロントスタッフ)の役割として、常に公演スタッフの一員であるという意識を持つことを具体的に教わりました。そして公演中は何事も起きないように努力することが、公演を『公演』として成立させるのに必要である事を認識しました。次に『プロ』としての基礎力について学びました。「ボランティアなのにそこまでするの?」「ボランティアなのにそこまでさせていただくの?」この二つの違いに気付かせて頂きました。又当日のポジションの知識・技術だけではスタッフとしての役割が果たせない。意欲(やる気・熱意)と“専門技術スキル”と“対人関係スキル”が、たし算ではなく掛け合わせることによって成果が果たせると教わりました。休憩なしの2時間、先生のお話しに引き込まれ、あっという間に過ぎてしまいました。昼食は交流会を兼ねてカテリーナで美味しく頂きましたが、午後の研修を控えて時間的にも又、気持ちにも余裕がないまま急いで制服に着替え、午後の研修に入りました。今回の公演は『チェコ・フィルハーモニー・ゾリステンwith 吉鷹奈津子』OJT方式(実際にフロントスタッフに携わりながら知識・技術の習得)としては初めてのクラシック公演です。朝礼は星乃先生自らがリーダーとなり開始。スタッフ一同緊張感が高まりました。いよいよ開場、1階・2階のスタッフの立ち位置や、お声掛けの仕方・無駄な動き等をその都度指摘。遅れていらしたお客様が多い時は、席の近い方を一緒にご案内するともっとスムーズになるとご指導を頂きました。今後のクルーズの大きな課題となりそうです。約2時間の公演後、スタッフルームに戻り先生から確認する点や改善する事項等いろいろお話を頂きました。最後に「なぜ、今こうするのか」を理解してスタッフとしての意識を高めていくよう助言がありました。そして、今日の公演に入る前の身だしなみ(化粧や髪)についてはお褒めを頂き、昨年度の研修が活かされていると実感しました。今日の研修を終えて「フロントスタッフとしてのゴールはない。一回り大きな器に変えて成長していく努力が必要」という言葉が心に響きました。今後もアーラにお越しになるお客様を笑顔でお迎えして満足していただける『おもてなし』が出来るよう、そして私自身も楽しめるように努力したいと思います。(A)

## フォローアップ研修を終えて

星乃先生を講師にお迎えして、午前中は座学、午後から主劇場にてフロント研修を行いました。座学は『初心にかえる!』と題してフロントスタッフの本質を再確認する為に行われました。基礎を学び、ボランティアとはいえフロントに立つという事は、出演者や裏方そしてお客様の事を考えると真剣に与えられた役割をこなさなければいけない事を改めて確認しました。午後からのフロント研修では、終始緊張のしっぱなしでした。「今ここで…」と考えていた疑問点も、すぐに教えて頂く事が出来スッキリしました。最後に、ストッパーの置く位置から扉の開閉などの細かな点まで、改めて話を聞く事が出来、大変有意義な一日となりました。(T)



## 編集後記

「門松は冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」一休さんの狂歌です。オギャーとこの世に生を受けたときから冥土への旅が始まるとすれば、それは人生そのものであり、一里塚は人生の節目であり、生きていればこそ使える言葉であるように思います。冥土の入口に立ち絶望することのないように、祝い酒の前にやりたいこと、やっておかなばならぬことを自問するのも良いのかも知れません。「一年の計は元旦にあり」です。(N)

ala クルーズ事務局 TEL/FAX : 0574-61-3414  
<http://www.kpac.or.jp/ala-crews/>  
Mail : [ala-crews@kpac.or.jp](mailto:ala-crews@kpac.or.jp)

